

『茶業鹿児島』 一昭和30年代から40年代の「かごしま茶」一

木下朋美¹ 本田咲美²

Tomomi Kinoshita Sakimi Honda

1：鹿児島県立短期大学生活科学科

2：鹿児島県立短期大学附属図書館

Key words：郷土資料、地域資料、デジタルアーカイブ、鹿児島県、茶業、食文化、喫茶風習、昭和30年代から40年代

I. はじめに

鹿児島県の茶業について調査する際、基本的な資料として『鹿児島県茶業史』を欠かすことはできない。『鹿児島県茶業史』は、鹿児島県茶業振興連絡協議会によって昭和61年(1986)1月に刊行された図書で、「本県茶業の発展過程を時代の背景の動きの中に位置づけた概説書」¹⁾として捉えられている。通史から始まり、県行政史、技術史、団体史、地方史を概説し、茶に関する風習、碑、歌に至るまで全1317ページにわたって編さんされている。

この『鹿児島県茶業史』の「主な引用、参考文献」として挙げられている資料の中のひとつに『新茶業』がある。『新茶業』は、鹿児島県茶業振興会から刊行された機関誌であり、昭和5年(1930)に発刊した²⁾。『鹿児島県茶業史』では『新茶業』から、記述を複数引用しており、鹿児島県の茶業に関する重要な情報が掲載された資料であると考えられる。また『鹿児島県茶業史』の巻頭写真の中にも、「発刊された県茶業振興会機関誌『新茶業』(昭和5年～15年刊行)」と記載され、5冊並べられた表紙のモノクロ写真が掲載されている³⁾。同様に、『新茶業』の刊行中止の後に発行された『茶業鹿児島』も、「県茶業振興連絡協議会発行機関誌『茶業かごしま』昭和43年～47年」と記載され、5冊並べられた表紙のカラー写真が掲載されている³⁾。

昨年筆者は、宇治市の茶問屋である株式会社桑原善助商店の桑原秀樹様より、戦前、京都、奈良、滋賀、三重、岐阜、静岡、埼玉、茨城、高知、宮崎、熊本、鹿児島といった茶産地でそれぞれに茶業に関する機関誌が発刊されていたこと、また鹿児島県で発刊されていた『新茶業』が京都府立図書館に所蔵されていることを伺った。昭和前半の鹿児島県内の茶業について調査をする目的で『新茶業』を探したところ、鹿児島県内の公共図書館では所蔵が確認できなかった。そこで、鹿児島県の茶業関係機関(鹿児島県茶業会議所、鹿児島県茶生産協会、鹿児島県茶商業協同組合、鹿児島県農業総合開発センター茶事業部)に問い合わせたところ、『新茶業』は見つからなかったが、その後継誌にあたる『茶業鹿児島』が見つかったとの回答が得られた。

『茶業鹿児島』は、『新茶業』の流れをくむ機関誌であり、鹿児島県の茶業について、

当時の状況を記録する貴重な資料であり『鹿児島県茶業史』にも引用されている。今回、所有する鹿児島県経済農業協同組合連合会茶事業部のご厚意により、資料を借用し、複製する許可をいただいたので、調査過程と共に資料内容について紹介したい。

Ⅱ．調査方法

1. 『新茶業』及び『茶業鹿児島』の発刊の経緯について

『新茶業』及び『茶業鹿児島』は発刊後、休刊する時期があったり、名称の変更があったりしたため、発刊の経緯からその後の変遷について、『鹿児島県茶業史』の記述を元にまとめた。

2. 『新茶業』及び『茶業鹿児島』の発行元団体について

『新茶業』及び『茶業鹿児島』の発行元団体は、現在は名称が変更され同名の団体は存在しない。そこで関連する団体の変遷を『鹿児島県茶業史』及び鹿児島県茶業会議所のウェブサイトにより調査した。

3. 『新茶業』及び『茶業鹿児島』の県内外図書館の所蔵状況について

日本国内の図書館における『新茶業』及び『茶業鹿児島』の所蔵状況について各種検索システムを用いて調査した。国立国会図書館の所蔵状況は「国立国会図書館サーチ」¹³⁾で検索し、全国の公共図書館の所蔵状況は「カーリルローカル」¹⁴⁾で検索した。

また、鹿児島県立図書館の所蔵状況については、システムに登録されていない資料が存在する可能性を考慮し同図書館へレファレンス調査も依頼した。加えて、全国の大学等の図書館については、「CiNii Books」¹⁵⁾を用いて調査した。

4. 『茶業鹿児島』の保存状態について

今回発見された『茶業鹿児島』について、その保管場所や保存状況について記録した。

5. 『茶業鹿児島』の記載内容について

今回発見された『茶業鹿児島』にどのような内容が記載されているかまとめた。

Ⅲ．結果

1. 『新茶業』²⁴⁵⁾及び『茶業鹿児島』⁵⁾の発刊の経緯について

『新茶業』は鹿児島県茶業振興会が発刊した機関誌である。鹿児島県茶業振興会の設立が昭和5年(1930)であり、1月に開かれた第13回茶業研究会において茶業機関誌発刊の決議がなされ、その具体策については役員会に一任された。役員は会長を県内務部長が務め、副会長を県茶業組合総合会議所会頭と県農事試験場長、幹事長を県農事試験場茶業部農林技師、常任幹事を県茶業組合総合会議所副会頭が務めた。幹事は県農事試験場知覧分場農林技師や県茶業組合総合会議所技師、県内各地域の茶業組合技師により構成された。そして同年11月3日に創刊号が発刊され、年4回発刊された。創刊当時の編集委員には、県農事試験場茶業部農林技師や、鹿児島朝日新聞記者、鹿児島新聞記者、県農事試験場知覧分場農林技師、県茶業組合総合会議所技師が担当した。『新茶業』の発刊は本県

茶業にとって特筆すべき大事業であり、製茶大量出荷奨励会、幼木茶園品評会と共に当時の県茶業振興の三大事業として大きな役割を果たした。

その後戦時下において、茶業界が一致協力して統制ある行動のもとに生産、流通、貿易にあたるため、昭和15年(1940)に第18回全国茶業組合理事会議において、機関誌統合が決議された。『新茶業』は同年1月の第11巻1号まで刊行された後、茶業組合中央会議所発刊の月刊機関誌『茶』に統合された。また『茶』の発刊事業は昭和18年(1943)4月号より日本茶業協会に移り、終戦になるまで続けられた。

刊行が途絶えていた『新茶業』であったが、その後昭和21年(1946)の鹿児島県茶業振興会の再発足に伴い、第一に取り組みされたのがその再発刊であった。戦後の茶業情勢と新知識を茶業者に広め、本県茶業復興に大きく役立った。しかしながら、戦後の厳しい状況からやむを得ず昭和24年(1949)には再度刊行中止となった。

その後も茶業振興をはかるため、鹿児島県茶業振興会の強化や機関誌の発刊に対する要望があり、昭和30年(1955)に振興会組織の改組が行われたのを機に、同年12月1日に『茶業鹿児島』が創刊され、昭和47年(1972)の第29号まで発刊が続いた。『鹿児島県茶業史』の中では『茶業鹿児島』と記述されており、また同ページ掲載の写真には『茶業かごしま』と書かれている⁵⁾が、発刊当初は『かごしま茶』というタイトルで刊行された。また第3号の編集後記に「なお本誌は第二号まで『かごしま茶』として発刊してきたが、本会の改組を記念するとともに、躍進しつつある本県茶業を更に前進せしめるべく、『茶業鹿児島』と改め、本三号から発刊することになった」という記述があり⁶⁾、『茶業鹿児島』に名称が変わった。さらに『茶業かごしま』第25号の編集後記に「本誌は昭和三十一年十二月『かごしま茶』として創刊されてから十有余年を迎えました。その間第三号から『茶業鹿児島』と改め」⁷⁾と記述があり、第25号から『茶業かごしま』に誌名が変更になっているが、『茶業鹿児島』の後継誌であることが分かる。

発刊と名称変更の変遷を図1に記す。本稿では個別に扱う場合を除き『かごしま茶』、『茶業かごしま』を含め『茶業鹿児島』と表記する。

2. 『新茶業』及び『茶業鹿児島』の発行元団体について

『鹿児島県茶業史』によると、鹿児島県茶業振興会は従来の茶業研究会を発展的に改組し、茶業関係者をもって一丸となり、生産、流通、販路拡張宣伝に寄与するために、本県茶業界唯一の機関として大きな役割を果たしたとある⁸⁾。昭和31年の改組では、それまで各地域茶業振興会ならびに趣旨に賛同する団体を会員として組織していたものを、荒茶生産者及び茶販売業者を正会員とし、各地区茶業振興会や、鹿児島県経済農業協同組合連合会、鹿児島茶商工業協同組合、製茶機械部会を賛助会員として、組織の強化がなされた⁹⁾。昭和36年には、その頃著しい発展を続けていた紅茶生産について、紅茶の持つ生産流通上の特殊性から、鹿児島県茶業振興会とは別の組織として鹿児島県紅茶生産協会が設立された。昭和39年には紅茶の生産団体と並んで緑茶の生産団体を組織することとなり鹿児島県緑茶生産協会が同年6月3日に設立された。会員は県内で緑茶製造工場を経営する者及び緑茶を集荷または販売斡旋する農業団体となっており、茶業振興会と異なり茶販売業者などは含めない組織であった¹⁰⁾。

紅茶や緑茶の生産者団体が誕生した一方で、本県の茶業振興施策を推進するには、生産

から販売にいたる一連の総合的対策が必要であり、その対策を協議する機関が検討された結果、県内の緑茶生産協会、紅茶生産協会(経済農業協同組合連合会はこの両生産協会員)、茶商工業協同組合、製茶機械部会の四団体を総合し、その上部機関として鹿児島県茶業振興連絡協議会を設立することとなり、昭和39年8月12日に発足した¹¹⁾。

鹿児島県内の茶業関係団体の変遷を記した鹿児島県茶業会議所のウェブサイト¹²⁾によると、『新茶業』を発刊した鹿児島県茶業振興会は現在の一般社団法人鹿児島県茶生産協会の前身として発足している。その後昭和39年に鹿児島県茶業振興会を改組した鹿児島県茶業振興連絡協議会は現在の公益社団法人鹿児島県茶業会議所の前身として発足している。組織の変遷について図1に示す。

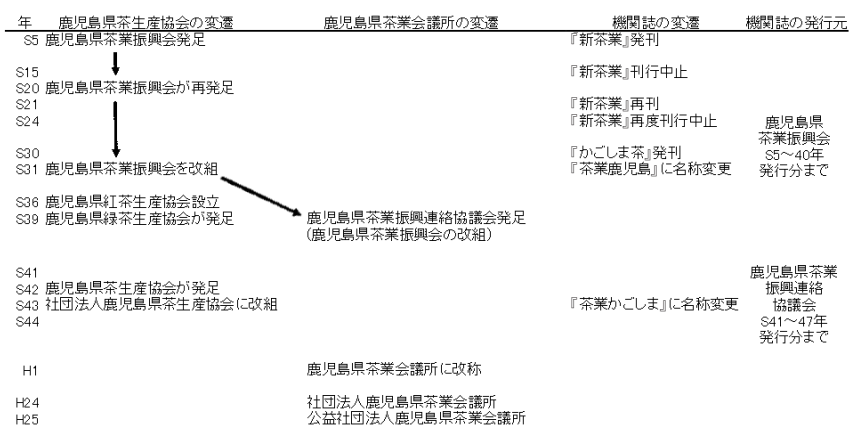


図1『新茶業』及び『茶業鹿児島』の発刊と発行元の変遷

3. 『新茶業』及び『茶業鹿児島』の県内外図書館の所蔵状況について

日本国内の図書館における『新茶業』及び『茶業鹿児島』の所蔵状況について各種検索システムを用いて調査した。国立国会図書館の所蔵状況は「国立国会図書館サーチ」で検索、全国の公共図書館の所蔵状況は「カーリルローカル」で検索した。「国立国会図書館サーチ」でも、都道府県立図書館及び政令指定都市立図書館の図書の所蔵状況を横断的に調査することができるが、雑誌は検索の対象外である。本稿で調査対象としている『新茶業』及び『茶業鹿児島』は、終期を定めずに定期的に発行されていた逐次刊行物であった。そのため、図書館によっては、図書ではなく雑誌として扱う可能性があることに留意し、図書に付与されたISBNではなく、キーワードを用いて様々な資料を一度に検索することができる「カーリルローカル」を用いることとした。

また、鹿児島県立図書館の所蔵状況については、同図書館ヘレファレンス調査も依頼した。加えて、全国の大学等の図書館については、「CiNii Books」を用いて調査した。

本稿で取り上げている、『新茶業』及び『茶業鹿児島』(『かごしま茶』、『茶業かごしま』を含む)の日本国内の図書館での所蔵状況を調査した結果は表1のとおりであった。このように、日本国内で『新茶業』及び『茶業鹿児島』を所蔵している図書館はわずかであり、今回の資料の発見は大変意義深いものであると考える。

表1『新茶業』及び『茶業鹿児島』の公立図書館等での所蔵状況

調査した図書館	新茶業	茶業鹿児島
国立国会図書館	所蔵なし	28号のみ所蔵
全国の公共図書館	京都府立図書館 に一部あり*1	所蔵なし
鹿児島県立図書館	所蔵なし	所蔵なし
鹿児島県内の公立図書館及び大学図書館	所蔵なし	所蔵なし
大学等図書館	所蔵なし	滋賀県立大学図書情報センターに12号のみ所蔵

*1 京都府立図書館では「2巻1号(昭6)～3.3巻1～3.4巻1～9巻3.10巻1～11巻1号(昭15);昭和22年1月(再刊)～23年3月, 7・9月」¹⁶⁾を所蔵している。

4. 『茶業鹿児島』の保存状態について

今回発見された『茶業鹿児島』は、「かごしま茶流通センターちゃびおん」内のかごしま茶 PR コーナーのガラスケース内から見つかった(図2)。同センターは鹿児島県経済農業協同組合連合会茶事業部が運営している。1階には茶取引斡旋所としての鹿児島県茶市場があり、2階にはかごしま茶 PR コーナーや、鹿児島県経済農業協同組合連合会茶事業部の事務所があり、鹿児島県茶業会議所の事務所も入っている。



図2『茶業鹿児島』が保管されていたガラスケース(写真提供：田代洋介様)

発見された『茶業鹿児島』は、B5サイズの黒色4穴綴込表紙を付けた状態で、黒い綴じひもでファイリングされており、2冊現物が確認できた(図3)。軽微な損傷及び書き込みはあるものの、本文の内容に影響はない状態であった(図4)。また、第1～24号までの『かごしま茶』、『茶業鹿児島』は製本されていなかったが、第25～29号の『茶業かごしま』になってから、A5サイズ版で製本された冊子体になっていた(図5)。刊行年月日順にファイリングされていたため、古いものが綴じられていた方を「分冊-1」(表2)、新しいものが綴じられていた方を「分冊-2」(表3)として扱った。「分冊-1」の背表紙には「1

号 20号 茶業鹿児島」、「分冊-2」には「21号 茶業鹿児島」と墨で書かれていた。さらにいずれも背表紙の下部に赤いペンで「永久保存」と書かれていたが、これは若干色が薄くなっていた。また一番下にはそれぞれ墨で「1」、「2」と番号が振ってあった。発行された第1～29号のうち、『かごしま茶』第1号と『茶業鹿児島』第14号は欠号であった。そのため綴られていた号は表2・3のとおりであった。



図3 発見された『茶業鹿児島』

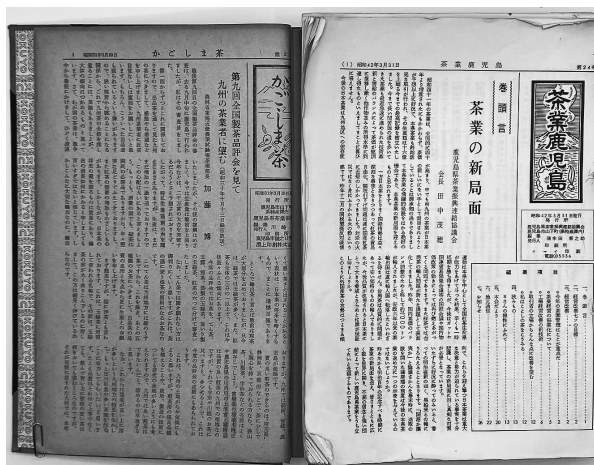


図4「分冊-1」の第2号『かごしま茶』と
「分冊-2」の第24号『茶業鹿児島』



図5『茶業かごしま』第25～29号

表 2 分冊 -1 に綴じられていた資料

誌名	号数	発行年月日	総頁数	発行元
かごしま茶	第2号	昭和31年3月10日	12p	鹿児島県 茶業振興会
茶業鹿児島	第3号	昭和31年7月1日 ^{*2}	15p	
	第4号	昭和31年10月1日	20p	
	第5号	昭和32年1月1日	28p	
	第6号 ^{*3}	昭和32年4月1日	22p	
	第7号	昭和32年11月1日	16p	
	第8号	昭和33年1月1日	20p	
	第9号	昭和33年9月1日	18p	
	第10号	昭和34年1月1日	32p ^{*4}	
	第11号	昭和34年7月20日	26p ^{*5}	
	第12号	昭和35年1月1日	30p	
	第13号	昭和35年7月1日	22p	
	第15号	昭和36年7月15日	24p	
	第16号	昭和37年1月1日	24p	
	第17号	昭和37年8月1日	26p	
	第18号	昭和38年3月31日	26p	
	第19号	昭和39年1月1日	24p	
	第20号	昭和39年3月31日	17p ^{*6}	

^{*2} 発行日について、表紙タイトル下部及び p.14 上部には「昭和 31 年 7 月 1 日」と記載されているが、その他のページの上部は「昭和 31 年 7 月 30 日」と記載されている。
^{*3} 第「5」号と印刷されているが、p.1 に第「6」号と修正されている。
^{*4} ページ付けは 30p まで。その後ろに広告が 2p ある。
^{*5} ページ付けは 25p まで。広告が 1p ある。
^{*6} ページ付けは 16p まで。広告が 1p ある。

表 3 分冊 -2 に綴じられていた資料

誌名	号数	発行年月日	総頁数	発行元
茶業鹿児島	第21号	昭和39年10月1日	24p ^{*7}	鹿児島県茶業振興会
	第22号	昭和40年3月31日	29p	
	第23号	昭和41年3月31日	39p	鹿児島県茶業振興 連絡協議会
	第24号	昭和42年3月31日	33p ^{*8}	
茶業かごしま	第25号	昭和43年1月15日	87p	
	第26号	昭和44年2月15日	86p	
	第27号	昭和45年2月15日	90p	
	第28号	昭和46年2月15日	74p	
	第29号	昭和47年3月15日	54p	

^{*7} ページ付けは 20p まで。その後ろに広告が 4p ある。

^{*8} ページ付けは 26p まで。その後ろに広告が 7p ある。

5. 『茶業鹿児島』の記載内容について

『新茶業』と同様、『茶業鹿児島』も当時発刊が期待されていたことや、機関誌の発刊が当時の一大事業であったことが記されている⁵⁾。今回発見されなかった第1・14号を除き、実際に『茶業鹿児島』の編集後記などを読むと、編集に携わった人達の努力や鹿児島の茶業を盛り上げようという想い、情報源として活用している読者の想いを読み取ることができた。

全号を通じて頻繁に掲載されていた内容として、茶の栽培・製造・仕上げ工程に関する技術的な内容や、新技術の解説、試験研究成果の報告、国内外の茶業情勢、茶業関連機関や茶商から生産者に求める茶づくりの提言、輸出に関する情報、茶産地の視察報告、県内外での茶業の出来事、市町村別の茶生産量や茶園面積、茶業振興大会の開催内容、品評会の結果、茶業振興計画、単発もしくは連載の読み物、県茶業振興会の総会の報告、県内各茶産地の地方通信、おしらせ、編集後記があった。その一部を表4～7に掲載する。茶業振興計画は昭和39～41年度分が掲載されていた。編集後記は第2～7号、第11号に記載されていた。

全体を通じて優良茶を作ることが強く意識されていた。また『茶業鹿児島』が発行された昭和30～47年の茶業情勢が表れており、紅茶に関する記述が多かった。広告に関しても、全面広告は紅茶の製造機械が載せられており、紅茶が脚光を浴びていたことがわかった。その一方で昭和34年発行の第11号では茶商の新原仁次郎氏が「緑茶にも馬力を掛けて下さい」という記事を書いていた。

アフリカ向けの釜炒り茶の輸出も行われていたので、第2号の「鹿児島港を九州釜炒り茶の市場化たらしめよ」や3・5号連載の「輸出向き釜炒り茶の製造法について」、第8号「釜炒り茶の生産をもっと真剣に」という記事もあった。

技術的な内容では、例えば第18号に「かんれいしゃ被覆について」の記事があり、今ではほとんどの茶園で行われている寒冷紗による被覆がこの頃登場したことが記されていた。読み物には様々は話題が掲載されていた。第8号の「かごしまのお茶の飲み方いろいろ」では、鹿児島では煎茶を飲む時に湯冷ましせずに熱湯を注ぐことや、お茶請けに漬け物を食べることなどが鹿児島の喫茶文化に関する内容が紹介されており、筆者は年配の方から話に聞いたことはあったが、記録として確認できたことは意義深い。

回顧録のような記事も多く、第12号では「一方PRにも心が配られました。茶の映画－努力十年、緊輝一番、鹿児島の茶業など多くの反対をおし切つて製作が刊行されました。」とあり、活動写真の映画が作られたといったことも書かれていた。

表4『茶業鹿児島』に掲載されていた茶の栽培・製造・仕上げ工程に関する技術の紹介

号数	内容（タイトル）
2号	成木茶園摘採についての考察
3号	輸出向き釜炒り茶の製造法について
4号	秋の茶園の肥培管理、茶園の敷草を急ぎましょう、新しい農薬の使い方、紅茶新品種の解説
5号	輸出試売釜炒茶の再製加工について
8号	荒茶工場の燃料費
9号	茶樹挿し木法改善
10号	紅茶製造の化学、秋から冬にかけての茶園管理
12号	紅茶品種の越冬管理、ツノロウムシの防除法、機械の手入れと工場経営
13号	夏の茶園管理
18号	かんれいしゃ被覆について、線虫防除について
19号	緑茶製造省力化セットの構想、廃品のポリ袋で茶園の雑草を防ぐ プロパンガスの取り扱いについて
20号	春から夏にかけての茶園管理
21号	茶園管理の改善について
22号	最近の育苗技術について、紅茶の機械摘採試験の結果と問題点、施肥効果
23号	大型製茶機導入の要点、緑茶施設の改善について
24号	経営改善7つの目標、茶園管理の改善について、茶業経営の協業化、 工場経営改善の新技術生葉貯蔵と大型機械化
25号	茶の品質を悪くしているものは何か、優良茶づくりの1方法、 銘茶作りに3日早摘みをしよう、茶園の被覆法とその効果、 茶園における有機物、茶園の除草剤、新しい苗木作りの要点
26号	台風16号による茶園の被害とその対策、防除基準に新たに引き上げられた新 農薬、接木の普及推進について
27号	茶と残留農薬、改良蒸機について、晩生品種の早期挿について
28号	渋味除去対策について、寒冷紗の茶園連続被覆効果について、 幼木園の裂傷害について、今後の苗木生産について
29号	新品種「さやまかおり」について、乗用型摘採機について、 茶と肥料の濃度障害について

表5『茶業鹿児島』に掲載されていた県内外での茶業の出来事

号数	内容（タイトル）
7号	第一回製茶大量出荷共進会
11号	鹿児島県茶業試験場の庁舎落成式並びに祝賀会
12号	茶業振興立法促進について
15号	鹿児島県紅茶生産協会が発足
16号	第16回全国茶品評会並びに茶業者大会の開催について（鹿児島県開催）、 全国紅茶生産組合連合会の発足、九州茶業協会発足
17号	第16回全国茶業祭り開催計画、紅茶産業振興基本計画
18号	茶業祭あとがき
19号	「さつまみどり」の発売
21号	鹿児島県茶業振興連絡協議会の発足、鹿児島県緑茶生産協会の発足
23号	陛下にお茶を献上

表6『茶業鹿児島』に掲載されていた生産者への茶作りの提言

号数	内容（タイトル）
2号	第九回全国製茶品評会を見て九州の茶業者に望む
6号	アンケート鹿児島茶に望む県外商社は鹿児島茶に？ アンケート今年の1・2番茶に望む市内商社はどんな茶を？
20号	需要に見合う優良茶生産を
21号	紅茶自由化に対するパッカーの考え方
22号	消費地はこんなお茶を望む
24号	取引者の立場からこんな点に改善を望む

表7『茶業鹿児島』に掲載されていた茶産地の視察報告

号数	内容（タイトル）
5号	関西茶業を視察して
6号	沖縄の茶業調査に使いして
7号	セイロン茶産業の実態、関東茶業視察雑感
8号	宮崎県児湯郡一帯の茶業を視察して
10号	優良茶の産地星野村をたずねて
12号	宮崎県の茶産地を視察して
16号	茶業視察随想（京都）
21号	静岡県等茶業視察報告
22号	茶業視察報告（埼玉）
25号	茶業みてあるき八女・インド・セイロン・台湾
26号	セイロンおよびインドの茶業見聞記

Ⅳ. 考察

今回発見された『茶業鹿児島』は、昭和30年代から40年代の鹿児島県の茶業やそれにかかわる情報を伝える貴重な一次資料である。『鹿児島県茶業史』のような図書にまとめられる上では切り捨てられてしまうような些細な情報も残されており、茶業のみならず食文化や喫茶風習など、当時の様子を窺い知ることができる。

鹿児島県の荒茶生産量は、2024年に静岡県を抜き全国第一位となった。品質においても、全国茶品評会や国内外のコンクールにて高い成績を収めている。ただし量、質共に高い水準の「かごしま茶」であるが、他府県の茶産地に比べブランド力や歴史的背景において欠ける点がある。鹿児島県の茶業の歴史を伝える資料として『茶業鹿児島』が発見されたことで、その点を補う一助となることを期待する。

『茶業鹿児島』は「郷土資料」に分類されるものである。郷土資料とは、「図書館資料の種類の一つで、図書館の所在する地域や自治体に関する資料」¹⁷⁾のことを指し、近年では「地域資料」とも呼ばれている。郷土資料は、その地域内でしか流通しない資料も多いため、収集における地域の図書館の責任は大きい。

本学附属図書館でも、「郷土資料コーナー」を設置し、鹿児島県に関する資料を学生及び教員の研究活動に供している。今回発見された資料についても、今後の研究活動の支援に役立てていきたいと考えており、そのために、資料のデジタル化を進めることを計画している。

従来、資料の複製と言えば、コピー機を使って紙に印刷し製本するのが一般的であったが、近年はデジタル化することが増えている。デジタル化によって保管場所であった書架が不要となり、紙の劣化の心配もなくなる上に、OCRでテキストデータに変換すれば、全文検索が可能となり利便性が向上する。電子化においては、著作権上の課題もあるが、今回の場合、著作権処理については事前に借用元に電子化の許諾を得ている。

さらに、デジタル化したデータを活用してもらうために、何らかの方法によってデジタルデータを公開し、最終的にはデジタルアーカイブ¹として提供できれば良いと考える。デジタルアーカイブ化することによって、いつでもどこからでも資料にアクセスすることができるようになるからだ。郷土資料については先述のとおり、地域から離れてしまうと入手が困難になるものが多い。より多くの人に活用してもらえるように整備していきたいと考える。

最後に、今回発見された『茶業鹿児島』のデジタル化をした後、OCRを用いたテキスト検索などを利用し、より詳細な調査を行いたいと考える。また今回見つからなかった『茶業鹿児島』の欠号や、『新茶業』について、その所在を今後も引き続き調査していきたいと考えている。本稿で述べた国内の図書館の所蔵状況についても、検索システムを用いての調査であるため、システムに登録されていない資料が存在する可能性もある。「地域の貴重資料は“思わぬところ”に存在する」と語る人もいる¹⁸⁾。どこかに残存する資料を見つけられることを願っている。

1 「有形・無形の文化財をデジタル情報として記録し、劣化なく永久保存するとともに、ネットワークなどを用いて提供すること」¹⁹⁾

謝辞

『新茶業』に関する情報をご教示下さいました株式会社桑原善助商店の桑原秀樹様、『茶業鹿児島』を発見して下さいました鹿児島県茶業会議所書記の出水達也様、『茶業鹿児島』の貸し出し及びデジタルアーカイブ化の許可を下さいました鹿児島県経済農業協同組合連合会茶事業部次長の田代洋介様に感謝申し上げます。

参考文献

1. 鹿児島県茶業振興連絡協議会編『鹿児島県茶業史』、朝日印刷、1986、p.1317
2. 鹿児島県茶業振興連絡協議会編『鹿児島県茶業史』、朝日印刷、1986、p.232-235
3. 鹿児島県茶業振興連絡協議会編『鹿児島県茶業史』、朝日印刷、1986、巻頭写真
4. 鹿児島県茶業振興連絡協議会編『鹿児島県茶業史』、朝日印刷、1986、p.424-425
5. 鹿児島県茶業振興連絡協議会編『鹿児島県茶業史』、朝日印刷、1986、p.478-479
6. 鹿児島県茶業振興会、茶業鹿児島、1956年、3号、p.15
7. 鹿児島県茶業振興連絡協議会、茶業かごしま、1968年、25号、p.87
8. 鹿児島県茶業振興連絡協議会編『鹿児島県茶業史』、朝日印刷、1986、p.227-228
9. 鹿児島県茶業振興連絡協議会編『鹿児島県茶業史』、朝日印刷、1986、p.470-471
10. 鹿児島県茶業振興連絡協議会編『鹿児島県茶業史』、朝日印刷、1986、p.638-639
11. 鹿児島県茶業振興連絡協議会編『鹿児島県茶業史』、朝日印刷、1986、p.640-641
12. 鹿児島県茶業会議所 <https://www.ocha-kagoshima.jp/outline/history/> 確認日：2025/1/7
13. 国立国会図書館サーチ <https://ndlsearch.ndl.go.jp/> 確認日：2025/1/7
14. カーリルローカル <https://calil.jp/local/> 確認日：2025/1/7
15. CiNii Books <https://ci.nii.ac.jp/books/> 確認日：2025/1/7
16. 京都府立図書館蔵書検索
<https://www.library.pref.kyoto.jp/opw/OPW/OPWSRCTYPE.CSP?ReloginFlag=1&BID=B10836122&DB=LIB&FROMFLG=1> 確認日：2025/1/7
17. 日本図書館情報学会用語事典編集委員会編『図書館情報学用語事典第5版』丸善出版、2020、p.52
18. 蛭田廣一『地域資料サービスの展開』日本図書館協会、2021、p.105
19. 日本図書館情報学会用語事典編集委員会編『図書館情報学用語事典第5版』丸善出版、2020、p.162